

京都市立銅駝美術工芸高校フォークソング部の部員と森本貴史教諭(後列左) 〓いずれも中京区鉦田町の同校



感性伝えたい 美術も音楽も

京都市立銅駝美術工芸高校

オトカラ

部屋で、毎日先着1バンドしか使えない。下の階には図書館があり、ドラムを使うときにはマツトを敷き、アンプの音量は最小限に抑える。

染織を専攻する西村さんは、「浴衣や織物を作るときには、原色や幾何学模様を自分らしさとして表現する。自分の感性で相手に気持ちや伝えようと努力する点で、美術と音楽は通じ合っている」と語る。ライブで部員たちはジャンプしたり、サングラスをかけて叫んだりするという。「みんなステージに立つと人が変わる。表現することへの喜びやこだわりを持っている」

鴨川沿いに立つ京都市立銅駝美術工芸高校(中京区)。フォークソング部は、吹奏楽部がない同校で楽器を扱う唯一の部活だ。部員数は1、2年生で55人と、同校で最大の人数を誇る。活動は他校の軽音楽部と同じ。28年にわたって顧問を務める森本貴史教諭(55)は「軽音楽部は音響機器をすべてそろえるイメージ。フォークソング部ならギター一本と歌だけで発表できる幅広さがあると考えたので」と部の名前の由来を推測する。

15年ほど前までは校内に練習場所がなかった。森本教諭が「外で練習するにはお金がかかる」と懸命に訴えて場所を確保。部費でドラムやアンプを買いそろえ、倉庫を片づけて部の機材置き場にしたという。ドラムやアンプがなかった頃は、学校近くの楽器屋で借りて運び込んでいた。

練習場所は校内の記念棟2階。幅10畳、奥行き15畳ほどの

部員は練習時間を増やそうと、校外のスタジオを借りる。ベースやボーカルで舞台上立つ部長の西村知紗さん(2年)もスタジオの常連。ライブが近くと通い詰める。

部員たちはいま、毎年12月にある校内の「ふじだなライブ」に向けた練習に忙しい。野外ライブをしたいという部員の声が高まり、2007年に実現した催し。校庭に藤棚があることからその名が付いた。放課後の校庭で鴨川を背に、今年は8バンドが演奏する。

男子部員4人組のバンド「オキシジェン」もふじだなライブに臨む。ボーカル兼ギターの田岡拓巳さん(2年)は「後半に聴いている人と一緒に合唱できる部分がある曲にした。寒空の下で一体感を出したい」。キーボードで出演する浜田康生さん(2年)は「音楽を楽しみながら、美術の創作に必要な表現力を高められるのがフォークソング部の良いところ」と笑顔を見せた。(高橋豪)



男子バンド「オキシジェン」の練習に、部長の西村知紗さん(左前)ら2人も加わった

京都市立銅駝美術工芸高校(中京区鉦田町) 1880年、府画学校として創立。現在地に移った1980年にいまの校名になった。2年生で絵画、陶芸、彫刻、デザインなど8分野から専攻を選ぶ。毎年10月の美作品展は、生徒が成果を発表する一大イベント。今年は1、2年生の作品展が12月に開催される。生徒数267人(1日現在)。